

2008年度 モンゴル・スタディツアー参加者報告

(財)日本ユニセフ協会学校事業部では、事業を指定した募金をカンボジアとモンゴルで行い、支援を続けています。毎年、支援国の子どもたちの状況や事業の進捗状況を先生方に視察していただき、学校や地域での学習や広報活動に役立てていただいています。今回、2008年度モンゴル・スタディツアーに参加された、小学校の先生の感想とその後の学校での取組みをご紹介します。



スタディツアー参加者
©日本ユニセフ協会

日程	2008年7月20日(日)～26日(土)
日本ユニセフ協会 が支援する事業	遊牧民の子どもは、教育の機会を持たず、栄養や健康の面でも十分なケアを受けられない生活をしている。こうした子どもたちの状況を把握し、状況に合わせた子どもたちの栄養、保健の改善、幼稚園教育の改良を進める。
視察概要	①遊牧民を対象とした移動式幼稚園の活動 ②厳しい状況下にあつて、保護を必要とする子どもに対する支援活動 ③郊外のゲル地区で劣悪な環境のもとで生活する元遊牧民に対する支援活動

東京都府中市立府中第四小学校

教諭 木村亮一

●視察の動機●

これまで、代表委員会がユニセフの活動を調べて発表するなどして、全校児童に募金の呼びかけを行ってきた。そして、子どもたちは、一人一人が入れたこの100円玉が、遠い国のどこかで役に立っているのだなという漠然とした思いを持っていた。私自身もそうであったので、「これは実際に見に行つてこないといけない」「子ども達に100円玉がどのように使われているのか伝えたい」と思い、今回のモンゴル・スタディツアーに参加することを決めた。

スタディツアーでは、個人の旅行では行けないような場所や、貴重なお話を多くの人達から伺うことができた。帰国後、ユニセフ週間の中で、全校児童に撮影してきたビデオ(子どもたちがウォーターキョスクに水を汲みに歩くシーン)を見せ、今日募金したそのお金が、世界の子どもたちを助けていることを伝えることができた。

日本の子どもたちには、当たり前のようにある水、食べ物、そして安全。それが、無い人達も世界にはたくさんいることを知ってほしい、子どもたちに、これから生きていく上で、たった一つの美しい地球を大切に、世界中をよく見ていく人になってほしいという願いを込めて実践活動を続けていきたいと思っている。



ゲル地区の子どもと記念撮影をする
木村先生
©日本ユニセフ協会

●視察の感想●

私が、この旅で一番気になっていたことは、住むところも着る物も食べるものも不十分なストリートチルドレンのことだった。寒い冬には暖かいマンホールで生活しているということも聞いていたので、



草原で風車をまわす移動式幼稚園の子どもたち
©木村亮一

現状はどうなのか、自分の目で見ておきたかった。ウランバートル市街を歩く子どもたちの姿は、比較的清潔でござっぱりしていた。しかし、観光客が出入りするレストランの前では、汚れた洋服の少年が飴やガムを外国人に売ろうと懸命に声をかけ、両替をするための銀行の前では、両手を合わせてお金を乞う少年の姿も見られた。市内中心部は高いビルなどが建設され急速に発展しているが、その外側には農村部から移住してきた人たちのゲル地区が広がり、貧富の差が大きいことを目の当たりにした。

市街地から数時間の草原では、夏の間(6月から8月)だけ開かれる、移動式のゲル幼稚園が開かれていた。遊牧民の子どもたちのために町から先生が週に一度やってくるそうだ。子どもたちが輪になって、聞き覚えのある「アブラハム人は七人の子」を踊りながら歌っていた。子どもたちの、よく歌を歌い、体を動かし、学ぶ姿に感銘を受けた。モンゴルの広い大地で、子どもたちは、目を輝かせていた。